

2. 社会科論文

自ら学び続ける授業の創造Ⅲ

人間の営みに共感し，自分の生き方を問い続ける社会科授業の創造Ⅲ
～新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決する学習指導～

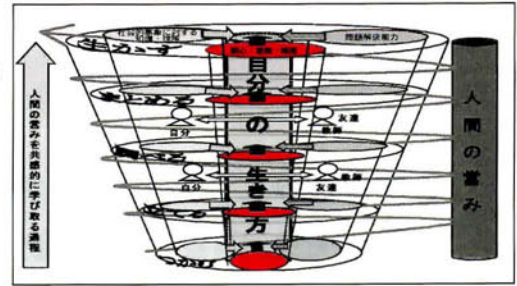


I	研究の立場	27
1	研究の歩み	27
2	本年度の研究の方向	27
II	本年度の研究内容	28
1	新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決するとは	28
2	新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決する学習指導とは	29
3	新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決する学習指導の具体化	29
(1)	新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決する学習内容	29
(2)	新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決する指導方法	30
III	授業プラン例	33
IV	研究の成果と課題	37
1	研究の成果	37
2	研究の課題	37

I 研究の立場

1 研究のあゆみ

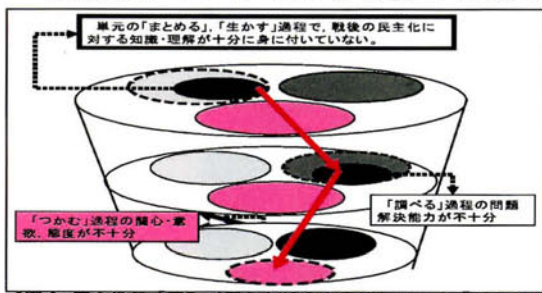
前研究では、「人間の営みに共感し、自らの生き方に生かす社会科授業」を目指し、思考・判断、表現・技能の発達特性の系統を基に、学習内容、評価、指導方法の在り方を研究した。その結果、わかる・できる喜びや楽しさを味わっていくことは、社会的な見方・考え方が高まっていくことにつながるということが明らかになった。



【図1 人間の営みに共感し、自分の生き方を問い続ける学びの様相】

しかし、全ての子どもが社会科を学ぶ意味を見出し、その学びに自信を持ち、学んだことを新たな社会的事象と出合ったときに生かしたり、自分の生き方に生かしたりしているのかという点はまだ不十分なこともあった。

そこで、平成18年度から「人間の営みに共感し、自分の生き方を問い続ける社会科授業の創造」というテーマの下、1年次は図1のように、子どもが人間の営みを共感的に学び取る過程において、三つの培いたい力を関連させながら自分の生き方とのつながりを見出していけるような姿を目指し、学習内容や指導方法についての基本的な考え方を明らかにした。



【図2 第6学年「平和で豊かな社会を目指して」の「つかむ」過程に表れた子どもの培いたい力の様相】

2年次は培いたい力を確実に身に付けるための学習内容を各学習過程に焦点を当て、発揮される力の状況から検討した。例えば、第6学年単元「平和で豊かな社会を目指して」では、図2のように、単元の「まとめる・生かす」過程で知識・理解が不十分な状況が、なぜそのようになったか原因を分析していくと、「つかむ」過程で追究対象に対する関心・意欲を高めていないことが分かった。

そこで「奄美の本土復帰運動」という地域素材を生かした学習内容を設定した。つまり、培いたい力が身に付いていない状況が各学習過程のどこに原因があるかを明らかにし、学習内容の妥当性を探ったのである。また、培いたい力を見取るための自己評価についても具体化を図った。

2 研究の方向

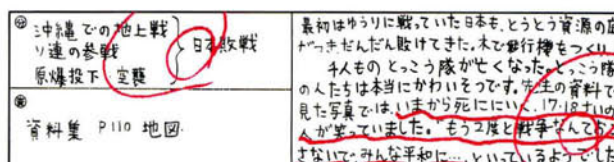
これまでの実践では、「人間の営みに共感し、自分の生き方を問い続ける」ために、社会科における三つの培いたい力である「関心・意欲、態度」「知識・理解」「問題解決能力」の関連に着目した学習内容や指導方法について研究をしてきた。その結果、学習指導要領改訂に向けた学習内容の検討や子どもがよりよく人間の営みに共感したり、自分の生き方を問い続けたりするための指導方法の改善が今後の課題となった。

そこで、本年度はこれまでの目標研究、学習内容研究を踏襲しながらも、学習内容を確実に定着させるための指導方法に焦点を当てる。つまり、1年次研究で想定した、「人間の営みに共感し、自分の生き方を問い続ける」姿がよりよく表れるための学習内容、指導方法を含んだ学習指導を具体化していくこととする。

そのために、三つの培いたい力を十分に発揮している子どもがどのような姿を表すのかを、昨年度研究までの自己評価カードや授業中における子どもの姿等を基に分析した。

すると、自己評価カードからは、図3のように、「資料を基に自分なりの追究ができた。わかった。」と自分の学びのよさを味わっている姿が表れた際に、三つの培いたい力を十

分に発揮しているということが分かった。しかし、すべての子どもが自分の学びのよさを味わっているとは言えない状況が見られた。そこで、三つの培いたい力を確実に



【図3 自己評価カード】

身に付けさせるためには、子どもたちが新たな社会的事象に出合ったときに、これまで学習で得た知識や技能等を駆使し、見方・考え方を広げたり、深めたりしていくような、自分の学びのよさを味わいながら追究していくことが必要ではないかと考えたのである。さらに、「人間の営みに共感し、自分の生き方を問い続ける」姿がよりよく表れるための学習内容、指導方法を含んだ学習指導を検討する必要性がこれまでの研究で課題として明らかになっていた。このことから、子どもが自分の学びのよさを味わうことができるような学習指導を検討していくことで、子どもの培いたい力をさらに高めていけることにつながるのではないかと考えた。

そこで、本年度は以下のようなサブテーマを設定し、「人間の営みに共感し、自分の生き方を問い続ける」姿がよりよく表れる学習指導について研究を進めていきたい。

人間の営みに共感し、自分の生き方を問い続ける社会科授業の創造Ⅲ ～新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決する学習指導～

Ⅱ 本年度の研究内容

1 新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決するとは

子どもたちは授業や日々の生活において、「人と人」「人と社会」「人と自然」の関係から成る社会的事象に触れる。子どもたちにとってこれらの出合いは常に新たな出会いであり、その新たな出会いを通して社会認識を深めたり、広げたりすることができる。その際、これまでに学んだことを駆使し、新たな社会的事象を追究することで、自分の学びが連続、発展していく。その連続、発展する姿こそが自分の学びのよさを味わう姿であると言える。自分の学びのよさを味わうためには表2のように三つの感覚に着目し、重点的に見取っていくことにする。なぜなら、自分の学びのよさを味わうための感覚は多様に有ると考えられるが（全体論文P5参照）、社会科では前の学習での見方・考え方を生かして次の追究対象を追究する機会が多く、自分の学んだ内容や方法に自信を持つ有能感・有用感や自分の解決方法を見出そうとする自己決定感が特に表れやすいからである。また、これらの感覚を味わわせることはその他の感覚も同時に味わわせることができると考えられ、受容感を味わわせることでこれらの感覚をより深く味わうことができるからである。なお、これらの感覚は地理的な学習内容に限らず、その他の学習内容でも味わえると考えられ、この三つの感覚を十分に味わわせることで、三つの培いたい力を確実に身に付けられると考えられる。

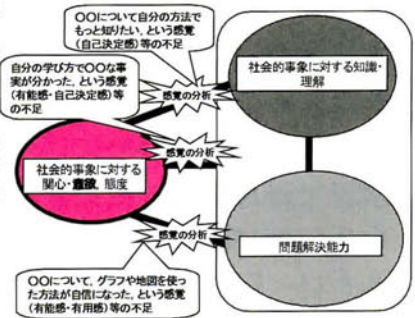
つまり、新たな社会的事象に対して、自分の学びのよさを味わいながら解決するとは、表2のような感覚を相互に関連させながら、問題解決能力を発揮し、社会的事象に対する認識を広げたり、深めたりすることである。

【表2 自分の学びのよさを味わう基になる感覚とその具体的な姿】

自分の学びのよさの基になる感覚	具体的な子どもの姿
「自分は自分で解決することができる。新しい社会的事象に出会っても自分の追究方法を活用できる。」等の学んだ内容や方法に自信を持つ有能感・有用感	「日本の水産業の特色を知るためには、『水産業にたずさわる人々の工夫』という自分が考えた内容やそれを追究する方法は自分のやり方でよかったんだ。友達にも教えられてよかったな。」
「新しい問題でも自分で解決方法を見出している。」等の自分の解決方法を見出そうとする自己決定感	「農業の学習で学んだ地図の見方を活用して、水産業の盛んな地域のことも調べてみたいな。」
「自分の追究した内容や方法がほめられた。」等の調べた内容や方法を認められたという受容感	「自分のグラフの見方がみんなにわかってもらえて良かったな。」

2 新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決する学習指導とは

1 年次研究において設定した子どもの「人間の営みに共感し、自分の生き方を問い続ける」姿に対して、表2で示した感覚に着目し、子どもの姿を三つの力の関連で具体的な姿を見取る。その際、図4のように、どのような感覚が不足していたかという視点で子どもの姿を分析し、学習内容や指導方法を含めた学習指導の改善を図ることにする。



【図4 新たな社会的事象に対して自分のよさを味わいながら解決する学習指導の基本的な考え方】

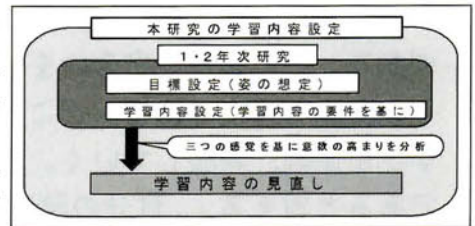
例えば、第5学年小単元「わたしたちの暮らしと水産業」において、「地図を使って水産業が盛んな地域が分かった。」という姿が不十分であった際は、「問題解決能力、知識・理解」と「関心・意欲、態度」の関連での有能感や有用感が不足しているといえる。そこで、「海流と漁港の位置の関係」という学習内容を付加し、地図を効果的に活用させる指導方法を設定し、子どもが自分の学びのよさを味わいながら学習に取り組めるようにする。

つまり、新たな社会的事象に対して、自分の学びのよさを味わいながら解決する学習指導とは、三つの培いたい力を確実に身に付けるために、表2に示された感覚を視点にして認識面との関連を基に考慮した学習内容や指導方法のことである。

3 新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決する学習指導の具体化

(1) 新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決する学習内容

授業の具体化に当たっては、三つの感覚に着目して、子どもが自分の学びのよさを味わいながら学べるように学習内容、指導方法を明らかにする必要がある。学習内容設定に関しては、基本的には2年次研究で明らかになった学習内容の要件を踏まえながら、子どもが味わう三つの感覚を基に学習内容を見直すようにする。(図5)



【図5 本研究の学習内容設定の基本的な考え方】

例えば、第6学年単元「明治維新をつくり出した人々」では、明治維新に関する基礎的・基本的内容の定着率は高かった。しかし、明治維新で鹿児島出身の数多くの人物が活躍しているにもかかわらず、「生かす」過程において自分の学び方で鹿児島の人物を調べてみようという自己決定感や自分が調べた方法に対する有能感・有用感をもつ子どもが少なかった。そこで、西郷隆盛の活躍を軸として明治維新を追究する学習内容の構造を見直した。そうすることで、様々な資料を活用し、西郷隆盛を中心とした鹿児島の多くの人物が明治維新にかかわり、日本を大きく変えていったことをとらえることができた。そして、同時にそのようなことを知ることができたという喜びを味わい、三つの培いたい力を確実に身に付けることができたのである。

また、右のような学習指導要領改訂に向けた学習内容も加味し、これまでの研究を生かして学習内容を精選したい。そして、新たな社会的事象に対してこれまで以上に問題意識を持ちながら、問題解決能力を発揮し、取り組んでいける内容を取り入れたい。

〈小学校指導要領案 改訂のポイントから(H20. 2. 15)〉

- 47都道府県の名義と位置、世界の主な大陸と海洋、主な国の名義と位置など学習や生活の基盤となる知識についての学習を充実。
- 我が国の代表的な文化遺産や縄文時代の生活など、我が国の伝統や文化についての学習を充実。
- 環境や防災、情報化、法や経済の基礎となる内容など、よりよい社会の形成への参画にかかわる学習を充実

(2) 新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決する指導方法

新たな社会的事象に対して自分の学びのよさを味わいながら解決する指導方法（以下指導方法と示す）に関しては、三つの感覚を味わわせるために、これまでの研究を踏襲しながら、学習過程ごとに検討し、さらに具体化していく。

子どもが、問題解決能力を十分に発揮し、社会的な見方・考え方を広げたり、深めたりするためには、子どもが三つの感覚を味わいながら、社会的事象に対してどのように出合い、解決していくかを考える必要がある。そのため、指導方法としては、教師が学習環境を整える必要性から「学習の形態・場」という視点と子どもが中心概念に迫ることができるような働きかけを行う必要性から、学習活動、発問、板書、評価等を中心とした「教師の具体的な働きかけ」という視点が大切であると考え。そこで、表3のような指導方法の視点と基本的な考え方から、指導方法を精選するために、指導方法の要件を設定し、それを基に指導方法を考え、具体化していくことにする。

【表3 社会科における指導方法の視点と基本的な考え方】

指導方法の視点	基本的な考え方
学習過程	人間の営みを共感的に学び取るための過程を構成する。1小単元1サイクルの問題解決学習（「つかむ」「立てる」「調べる」「まとめる」「生かす」）を基本とする。（全領域で共通）
学習の形態・場	子ども同士が学び合い、学ぶ価値を実感しながら、社会的事象に対する見方・考え方を深めたり、広げたりできるような環境設定や追究の際のグループ編成
教師の具体的な働きかけ	子ども一人一人が自分の生き方を問い続けることができるようにするための学習活動を用意するとともに、発問や資料提示、板書、評価等を行う。

指導方法の要件の設定にあたっては、まず、指導方法の視点を基に、三つの感覚が「どのような働きかけを行ったときに特に見出せたか。」という視点でこれまでの実践を見直すと共に、「このような働きかけを行えばこのような子どもの姿が表れるであろう。」という想定も含めて、要件を見出していくことにする。

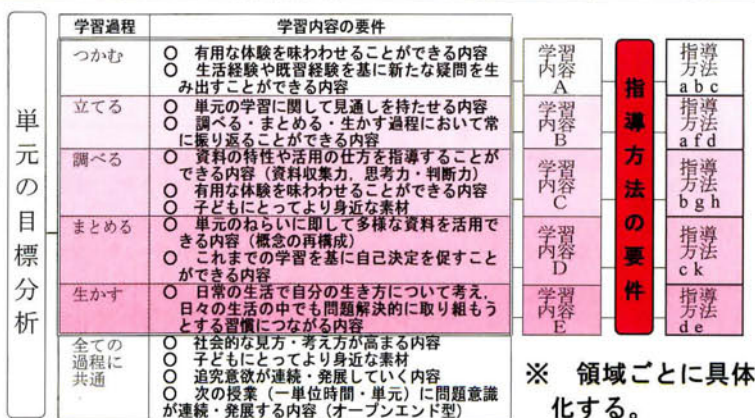
小学校社会科においては、それぞれの単元の特質を考えたときに単元を表4のような領域に分けることができる。

【表4 各単元の学年・領域別の分類】

学年	地理的領域	産業的領域	公民的領域	歴史的領域
3年	・学校のまわりの様子 ・鹿児島市大発見	・市の人々の買い物 ・ボンタンアメ工場の仕事	・みんなのつかうしせつ	・昔のくらし
4年	・県の地図を広げて ・県のいろいろな地いきの人々のくらし		・わたしたちのくらしと水 ・わたしたちのくらしとごみ ・安全なくらしを守る	・用水を引く
5年	・わたしたちの住む国土 ・わたしたちのくらしと環境 ・わたしたちのくらしと森林	・わたしたちのくらしと農・水産業 ・わたしたちのくらしと工業生産 ・わたしたちのくらしと情報産業		
6年			・わたしたちのくらしと政治 ・世界の中の日本	・人々のくらしと歴史

そこで、指導方法もこの4つの領域で分類できると考えた。

授業へ具体化するにあたっては、図4で示されるように、まず、単元の目標分析を行う。次に、学習内容の要件を基に三つの感覚も考慮して学習内容を設定する。さらに、指導方法の要件を基に指導方法を検討する。その際、学年の発達段階も考慮し、単元ごとにさらに具体化できるようにする。



【図6 指導方法の要件を基にした授業の具体化のモデル】

以上のような考え方を基に指導方法の要件を示すと、表5のようになる。

【表5 指導方法の要件】

過程	学習の形態・場	教師の具体的な働きかけ (4領域共通) ⑥…評価	教師の具体的な働きかけ(領域別) ⑥…資料			
			地理的領域	産業的領域	公民的領域	歴史的領域
つかむ	操作活動 話し合い 個→全体	⑥：ウェビング図→実態把握 これまでに学んだ方法に自信 を持つ有能感・有用感を味わ わせるために、資料を基に新 しく出会った事象をこれまでの 学習で得た知識と比較したり、 関係付けたりして考えさせ る。 ⑥：発言、ノート、振り返り カード等 → 学んだ内容と子どもの感 覚を評価	⑥：地図・地形図等 → 資料を基に、気 付きや自分の経験 で知っていること を発表させる。 ⑥：写真・絵図等 → 地形や土地利用等 に着目させ、地域の 様子や自然条件、そ こに住む人々のくら いについて疑問をも たせ、学習問題を焦 点化させる。	⑥：実物 → 実物を基に、気 付きや自分の経験 で知っていること を発表させる。 ⑥：写真・統計資料 等 → 実物と統計資料 と関連させ、生産 の様子について疑 問をもたせ、学習 問題を焦点化させ る。	調査活動：学習対象 について、身近な場 所の簡単な調査をさ せる。 ⑥：実物、写真、統 計資料 → 資料と調査活動 の結果を比較した り、関連付けたり して、追究対象の 働きについて疑問 をもたせ、学習問 題を焦点化させる。	⑥：絵図、写真、年 表 → 略年表から時代 の大まかな流れの考 えさせるとともに、 資料同士の比較を 基に話し合い、疑 問点や矛盾点を明 らかにさせ、学習 問題を焦点化させ る。
	話し合い グループ →全体	自分の解決方法を見出そう とする自己決定感を味わわせ るために、追究する内容や方 法等の追究計画を明らかにさ せるようにし、追究の柱を立て させる。	地理的条件と人々 のくらしの視点から 追究の柱を立てさせ る。	工夫や努力、盛ん な地域の様子、他地 域とのつながり等 の視点から追究の柱 を立てさせる。	施設の役割、自分 たちの生活との関連 等の追究の柱を立て させる。	政治、文化、人々 のくらしを中心とし た追究の柱を立て させる。
調べる	一人調べ 個	教科書や資料集、地図帳等 から分かった事実をノートに 書かせる。 ⑥：ノート、振り返りカード等 → 自分の解決方法を見出そう とする自己決定感を味わ わせるために、学んだ内容 と子どもの感覚を評価	方位、位置、地形、 土地利用、人々の様 子等に注目させる。	人々の工夫や努力、 見学する場所の地理 的条件に着目させる。	施設の位置等の地 理的条件、働く人や 利用する人の様子に 着目させる。	史料の意味を考え させる。当時の時代 背景や人々の生活の 様子や思いに着目さ せる。
	見学個 グループ 新聞作成 情報 話し合い グループ →全体	地図や絵図、統計資料、年 表等を有効に活用し、正しい 情報を記入させるようにする。 ⑥：発言、ノート、振り返り カード、ウェビング図、ポ ストテスト等 → 有用感・有能感・自己決 定感を味わわせるために学 んだ内容と子どもの感覚を評価	⑥：地図・地形図・ 積層模型 → 土地の様子 ⑥：写真・絵図 → 人々の様子 ⑥：統計資料 → 気候、産業 資料同士の関係 付けから、自然条 件と人々のくらし の様子についてと らえさせるように する。	⑥：地図 → 自然条件、社会 的条件と地域の関 連 ⑥：人材・VTR・ 写真・具体物 → 人々の工夫や努力 ⑥：統計資料 → 量、変化等から 産業の特徴 資料同士の関係 付けから、産業と 自分たちの生活と の関係について とらえさせる。	⑥：地図 → 施設の位置と利 用する人の願いと の関連 ⑥：人材・VTR・ 写真・絵図 → 人々の工夫や努力 ⑥：統計資料 → 施設の役割、生 活への影響 資料同士の関係 付けから、公共施 設等が果たす役割 についてとらえさ せる。	⑥：年表 → 出来事、期間、 順序、背景 ⑥：人材・実物・写 真・絵図 → 様子、因果、背景 ⑥：地図→位置、推 移 → 統計資料 量、変化、背景 資料同士の関係 付けから、当時の 様子や人々の思い をとらえさせる。
まとめる	話し合い 全体 個人新聞 作成 個	学習問題に対する答えを明 らかにさせる。 学んだことを再構成し、自 分なりの資料を活用し、まと めさせる。 ⑥：ウェビング図、ポスト テスト → 有用感・有能感・自己決 定感・受容感を味わわせる ために相互評価と合わせて 子どもの学び方を評価	⑥：地図、統計資料等 を活用し、まとめさ せる。 土地の様子や人々 の様子に視点をあて 追究させる。	⑥：絵図、統計資料、 地図等を活用し、ま とめさせる。 関連する産業や他 の産業やに視点をあ て追究させる。	⑥：絵図、統計資料等 を活用し、まとめさ せる。 関連する他の施設 に視点をあて追究さ せる。	⑥：年表、地図、統計 資料等を活用し、ま とめさせる。 同時代の他の人物 や事柄に視点をあて 追究させる。
	生かす 個	他の対象 他の対象に視点をあて追究 できるように、活用する資料 を考えさせる。	他の対象に視点をあて 追究させる。	他の対象に視点をあて 追究させる。	他の対象に視点をあて 追究させる。	他の対象に視点をあて 追究させる。

例えば、指導方法の要件を基にして設定した、第5学年「自動車をつくる工業」(産業的領域)の「つかむ」過程での具体的な指導方法は以下のとおりである。

過程	指導方法の要件 (学習の形態・場、教師 の具体的な働きかけ)	具体的な指導方法
つかむ	学習の形態：個→全体 学習の場：操作活動・話 し合いの場 ⑥：実物 → 実物を基に、気付き や自分の経験で知っ ていることを発表させる ⑥：写真・統計資料等 → 実物と統計資料と関 連させ、生産の様子に ついて疑問をもたせ、 学習問題を焦点化させ る。 ⑥：発言、ノート、 振り返りカード	⑥：自動車の部品 ○ 自動車に多種多様な部品があることに気付かせるために、自動車の部品を観察し、気付いたことやどのような働きがあるかを発表させ、自動車の部品が1台に何個あるかを想像させる。 ⑥：ペーパークラフトの自動車・グラフ(自動車工場の生産台数) ○ 組み立て工場が自動車を作られる速さをとらえさせるために、紙製の自動車模型を実際に自分たちで作る活動をする。子どもがペーパークラフトの組立に時間がかかる様子が見られたら「実際はどれくらいの早さで作られているのだろうか」と発問し、組み立て工場の生産台数から単位時間あたりの生産量を計算させる。 ○ 単位時間あたりの生産量に驚きが見られたら、「どのようにして自動車生産が行われているのだろうか。」という問いを導き出すために、多種多様で、約3万点という部品の数と単位時間あたりの生産量の多さという事実を関係付け、自動車生産に対する驚きを持たせるようにする。 ○ 一人一人の問いを明らかにするために、自動車をつくる工業について、子どもがもった様々な驚きや疑問を基に、学習問題を設定する。 自動車をつくる工場では多くの種類や数の自動車をどのようにして速く、正確につくっているのだろうか。 ○ 振り返りカードを基に自分の学んだ内容、方法を振り返らせるようにする。

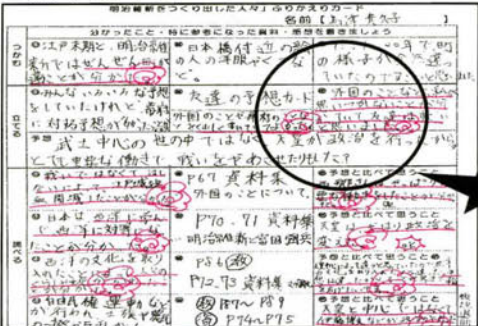
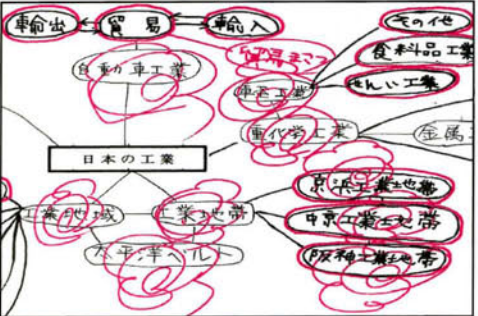

子どもが、よりよく「人間の営みに共感し、自分の生き方を問い続ける」ことができるために、三つの感覚をどのように味わっているかを教師が見取ると共に、子ども自身も互いに評価できるようにし、それを指導に生かしていくことにする。

これまでの研究では、診断的評価（ウェビング図、質問紙等）、形成的評価（発言、表情、ノート、振り返りカード、ウェビング図等）、総括的評価（ウェビング図、ポストテスト、ノート、作品等）による評価を行ってきた。

これらの評価方法を生かして、子どもの三つの感覚を基にした子どもの姿を見取ることができるようになるために、本年度は振り返りカード、ウェビング図、ポストテストを活用した評価を効果的に取り入れることにする。

これらの評価と合わせて、調べた内容や方法を認められたという受容感をよりよく味わわせるために、友だちの意見との比較検討の場を大事にし、内容面での理解の深化を図ると共に、意見を認め合い、「自分の生き方を問い続ける」ことができるようにする。そうすることで、自分の考えと友達の考えを関係付けて振り返りカードに記入する姿が見られたことから、自分自身の自己評価を高めることにつながるといえる。

【表6 評価方法と見取り方】

評価方法	見取り方
<p>振り返りカード</p> 	<p>「立てる」過程で設定した学習問題に対する予想と比較しながら「調べる」過程で学んだことを記入させる。その時の感想から友達の学びのよさを知る姿や自分の学んだ内容や方法に自信を持つ有能感や自分の解決方法を見出そうとする自己決定感を持つ姿を見取る。その姿が見られた場合は記述したことにアンダーラインや丸印で朱書きをする等の価値付けを行う。その姿が充分でない場合、授業で活用した資料や補助資料を再度提示するなどし、内容や方法に関する問いかけやかかわりを行うようにする。</p>
<p>ウェビング図</p> 	<p>単元の初め、単元の途中（二重囲みのもの）、単元の最後（赤の書き込み）の3度記入させる。認識がどのように広がったか、また、事象同士をどのように関連付けられたかを見取る。また、単元の途中での記入の際に友達と比較する場を設け、その際の相互評価を通して自信につながったものに花丸印をつけさせる。そうすることで、学んだ内容や方法に自信を持つ有能感・有用感を持った姿を見取る。その姿が充分でない際は、事象同士をつなげるための資料提示や発問をし、個に応じた指導を行うようにする。</p>
<p>ポストテスト</p> 	<p>授業の最後に、本時の中心概念を教師が問い、それをノート等に記入させる。その後、全員でその内容を確認することで、「知識・理解」についての基礎・基本の定着が図られているかを見取る。また、子ども一人一人が学んだ内容や方法に自信を持つ有能感・有用感を持ち、次時の学習に対する学び方について自分の解決方法を見出そうとする自己決定感を持つ姿を見取ることができる。その姿が充分でない場合は、本時の授業を振り返り、中心資料に再度着目させ個に応じた指導を行うようにする。</p>

Ⅲ 授業プラン例

第4学年
歴史的領域

用水を引く

1 単元の目標

- (1) 地域の発展に尽くした先人の働きについて関心を持ち、これまでの学習や生活経験を振り返りながら主体的に取り組むことができる。
- (2) 自分たちの生活と、自分たちが住んでいる地域を開発した先人の働きや苦心とを関係付けながら考えることができる。
- (3) 地域の発展に尽くした先人の働きや苦心について、自分の調べたことを明確にしていくために、絵図や文、年表にまとめることができる。
- (4) 自分たちの地域には、強い信念をもって情熱を傾け、よりよい生活を求めて努力し、地域の発展に尽くした先人がいたことを理解し、地域の発展の陰には多くの人々のくらしを高めたいという願いや努力、苦心があったことに気付くことができる。

4 指導計画（全15時間） ※ 但し、評価は形成的評価（評価方法欄の(1)～(4)は目標との対応）

(1) つかむ過程（1時間）

主な学習活動	資料と主な働きかけ	⑧…資料
1 小野田用水が作られた頃の餅田村の様子について話し合う。 2 小野田用水についてははっきりさせたいことを話し合い、学習問題を設定する。 小野田用水はどのような工夫をして作られ、人々はどんな苦勞をしたのだろうか。	㊦ 写真（現在の餅田村があった場所）…A ㊦ 絵（用水路が引かれる前の餅田村）…B ㊦ ① 米を作るには水を引く必要があったことに気付かせるために、2つの資料を比較させ、用水路が作られたことをとらえさせる。 ㊦ ㊦ 断面図（思川と別府川の中の餅田村）…C ㊦ ① 「水を引くために何か工夫をしたのではないか。」と疑問をもたせるために、川よりも高い位置にあることに餅田村があることに着目させる。 ㊦ ㊦ 実物（もっこ） ㊦ ② 先人の苦勞に気付かせるために、実際にもっこを持たせ、大変な苦勞をして作っていることをとらえさせる。 ㊦ ㊦ 数値（小野田用水の長さで作成年数） ㊦ ② 大変な苦勞をして作っていることに気付かせるために、11kmの長さの用水路を6年かけて作っていることから、先人の働きや苦心に着目させる。	



(2) 立てる過程（1時間）

主な学習活動	資料と主な働きかけ	⑧…資料
3 予想し、調べる内容や方法、順序について話し合う。 〔調べる内容：追究の柱〕 ○ 用水路の作り方 ○ 用水路を作った理由（人々の願い）	㊦ ③ 一人ひとりの予想を確かなものにするために、開発にかかわった人々の作るための工夫と開発後の変化から学習問題に対する 予想を立てさせる。 ㊦ ④ 調べる観点を明確にするために、自分なりの予想をさせ、それらをグループで集約して考えさせるようにする。 ㊦ ㊦ 見学のしおり ㊦ ① 見学の見通しをもたせるために、小野田用水見学の日程やルートを示し、何をみたいか考えさせるようにする。	

(3) 調べる過程（11時間）

主な学習活動	資料と主な働きかけ	⑧…資料
4 小野田用水を見学する。 5 観察や聞き取りを通して分かったことを基に、グループで整理する。	㊦ ㊦ 見学のしおり、読み物資料 ㊦ ⑤ 具体的な観察や聞き取りの観点を明確にするために、見学場所を地図で確かめさせ、疑問に思ったことを話し合わせる。 ㊦ ① 各自の小野田用水についての考えを確かなものにするために、調べたことを話し合わせ、グループ新聞に整理させる。	

2 本小単元設定の意義

本単元「用水を引く」における地域の発展に尽くした先人の働きを中心とした学習内容は、現地に行って見学をしたりもっこを担ぐ作業をしたりという有用な体験を味わわせたり、これまでの学習で昔の道具を扱った経験を基に、新たな疑問を生み出したりすることができるという学習内容の要件に合致している。そして、歴史的領域であるが、断面図や地形図などを活用することで地理的な見方・考え方を高めることもできる。また、昔の道具を扱った経験から、「用水路を作るための新たな道具に出合っても、勉強したことや遊んだことを生かして学習することができるよ。」という感覚を味わいながら培いたい力を高めることができる。このことから、鹿児島市西佐多町にある小野田用水を扱うことが妥当であると考えられる。

3 評価規準（総括的評価）

社会的事象への関心・意欲・態度	地域の発展に尽くした先人の働きに関心をもち、進んで調べようとする。
資料活用を基にした思考・判断	自分たちの生活と、自分たちが住んでいる地域を開発した先人の働きや苦心とを関係付けながら考えることができる。
自分の考えを整理、再構成した表現	絵図や文、年表を基に、地域の発展に尽くした先人の働きや苦心について説明できる。
社会的事象についての知識・理解	地域の発展に尽くした先人の願いや工夫・努力をとらえることができる。

子どもの姿と具体的な働きかけ		◎…評価	㊦…形態や場
①	写真と絵を比較させることで、水を引いてきたから、米が植えられるようになったのだということに気付かせる。そこで、「なぜ、昔の人たちは水を引くことができなかったのだろうか。」と問いながら、断面図を掲示することで、水は低いところから高いところには流れないから、高いところにある餅田村には水が引けないのだということに気付かせる。		
②	ここでは、片子山にあった岩を実際に担がせる。担いだ子どもたちは「重い、持ちたくない。」と言い出すので、「昔の人たちはどのようにして作業を進めていたのだろうか。」と問い、「手作業で作業を進めたのだ。」ということに気付かせる。そして、それらの作業が6年間にも及び、1.1kmの用水路を作った事実を知ること、「すごい」、「どんな工夫をして作ったのだろうか。」という驚きや疑問をもたせるようにする。これらから、学習問題が設定される。		
評	(1)の地域の発展に尽くした先人の働きに関心をもつ様子（発表、つぶやき、ノート）		
場	もっこを実際に担いだ経験を基に全体で話し合うことができる場		

【ゲストティーチャー（GT）を活用するときのポイント】

本小単元では、GTとして、地元で長く住んでいらっしゃる方に、小野田用水についてご説明をいただいています。小野田用水のことを昔から知っていらっしゃる方の話を聞くを通して、地域の発展に役立っていることを子どもたちは実感としてとらえることができます。その際は、次のことに気を付けるといいでしょう。

1 何を調べるための見学なのか

子どもたちが何を調べるのか、子どもたちが追究することについて説明する必要があります。具体的には追究の柱を基にして、それぞれにかかわることを見聞きさせたいことを伝えます。

2 どんなルートを考えていて、何に着目させたいのか

本小単元の場合は、施設の中ではなく、屋外ですので、具体的な見学ルートを考える必要があります。そして、その中で、取水口や川の支流を横切る用水路、昔からの石垣、石越、山沿いに流れる用水路に着目させながら、追究させていくことを伝えます。

3 子どもたちの安全面に対する配慮

子どもたちを引率していくので、安全面の配慮が必要です。道路歩行のさせ方、この横断歩道を渡るか、危険箇所はどこかなど事前に確認します。また、トイレや給水場所などが確保できるのかなども見学をさせる上で大事なポイントになります。バスなどを利用する際は、バスをどこに停めるかなども打ち合わせましょう。



【ゲストティーチャーの話を聞く様子】

子どもの姿と具体的な働きかけ		◎…評価	㊦…形態や場
③	子どもたちの予想は、大方が用水路の作り方に向かうことが考えられる。そこで、予想を広げ、深めるために、人々の願いや暮らしに目を向けている考えを認め、全体に広げること、新たな予想を見出すことになる。		
④	4年生にもなると、子どもたちは根拠をしっかりとって予想を立てることができるようになるにつつある。自分もった考えを友達に伝える活動を通して、子どもたちは自分の考えのよさや友達の考えのよさを味わうことができる。そのようにして考えを高めた子どもたちの姿を机間指導しながら認め賞賛していく。		
評	(1)の地域の発展に尽くした先人の働きに関心をもつ様子（発表、つぶやき、ノート）		
場	もっこを実際に担いだ経験を基に全体で話し合うことができる場		

子どもの姿と具体的な働きかけ		◎…評価	㊦…形態や場
⑤	見学するだけでは、子どもたちは用水路を作ることになったきっかけや人々の働きや苦心を十分に考えることができると言えない。そこで、読み物資料を準備し、子どもたちに読ませることによって、見学で見聞きしたことをさらに深めることができるようになる。また、見学のしおりを生かして、見学の流れを把握させておくことによって、子どもたちは見通しをもって見学に参加することができる。		

- ⑥ 流水実験をすることで、子どもたちは水の流れを基に、水門で水の流れが遮られた結果、別の方向に水が流れるようになることを話し合いながら分かるようになる。そして、「なぜ、このように水を堰き止めて、流れを変えるのだろうか。」と問うと、子どもたちは友達と話し合うことができるようになる。
- ⑦ 水稲と陸稲の実物だけを見ると、ほとんど区別ができないが、実際に植えているところの写真を掲示し、地面に着目させることで、水が張られていない方が陸稲であることに気付くことができる。
そして、読み物資料で調べたことや、GTに教えてもらったことを基にして、陸稲がどのような作物であるかということや、水稲が植えられるようになった結果、人々のくらしがどのように変わったのかを話し合うことができる。
- 開発後の用水路の経路と、現在の用水路の経路を比較させることによって、読み物資料の中にも書かれている「400年前に作られた小野田用水が、現在住んでいる人々の生活でも、防火用水としても農業用水としても生かされている」ということをより実感としてとらえることができる。
- 子どもたちに追究の柱に沿って分かったことを整理させる際に、私たち教師は子どもたちがより追究できるようにするために、補助資料を持ち込んで、子どもたちの学習にかかわる。例えば、読み物資料の年表の読み取り方が分からない子どもには、今から見て何年前にどんなことがあったのかを読み取れるようにする。子どもたちが調べ活動をしているときこそ個別にかかわれるチャンスである。
- ⑧ (1)のこれまでの学習(見学)を基に、(2)の自分たちの生活と、自分たちが住んでいる地域を開発した先人の働きや苦心とを関係付けて考える姿。(3)の調べたことを絵図や年表を使ってグループ新聞に表現する姿。(グループの話し合い、グループ新聞、見学のしおり、ノート)
- ⑨ 見学したことを基に、グループで話し合いながら、追究の柱ごとに自分の考えを補強・強化・修正する場

今から	年代	主な出来事
410年前	1593	小野田用水開通 ○ 島津藩の開田作業として、小野田いぜき・用水路を開く。
340年前	1664	ふれ田用水開通 ○ 片子岳トンネルをほり、ふれ田いぜき・用水路を開く。
280年前	1726	片子岳トンネル修理 ○ 地ばんがもろく、落石がたびたびあり、加治木から石材を運び、修理した。
140年前	1861	ふれ田いぜきのかいりょう ○ こう水のたびに、せきがこわれたので、国にかいりょうを願った。

小野田用水が完成してから

【授業のネタは至る所にある！】

地域素材を教材化する際の手順

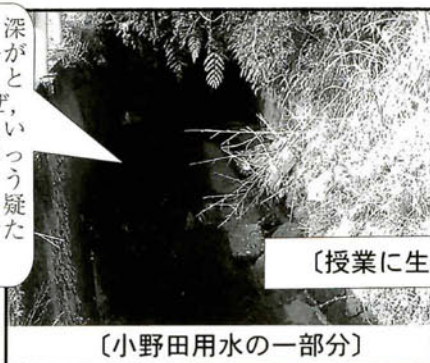
- ア 資料の収集
大まかにとらえた基礎的・基本的な学習内容を基に、鹿児島県、鹿児島市、子どもが住んでいる地域に関する資料・文献等を収集する。
- イ 地域素材に関する資料の整理・分類
収集した資料を整理・分類し、教材化するものを選択する。
- ウ 教材としての検討(教材化のポイント)を基に検討する
- エ 指導計画への位置づけの検討

- 地域素材教材化のポイント
- 子どもの知的好奇心を高められる教材
 - 人間の生き方に共感できる教材
 - 社会的な見方・考え方を広げられる教材
 - 問題解決能力を高めることができる教材
 - 学習内容を十分精選した教材
 - 学習内容が子ども自身に見えやすい教材

地域の発展に尽くした先人の働きや苦心をとらえさせたいと考えた先生方は取材に出かけられることと思います。教材となりうるものに多く出会い、悩まれたことではないでしょうか。しかし、あれもこれもと欲張ってはいは、私たちの「教えたこと」を子どもたちの「学びたいこと」につなげていくことができません。そこで、私たちは、左のような教材化する際の手順を考えました。

また、地域素材を教材として検討する際には、以下のようなポイントを満たしたものが妥当だと考えます。社会科は認識教科ですから、事実を基に考えさせることが大切です。社会的事実を調べさせた上で、子どもたちが話し合い活動に参加し、お互いの考えを出し合いながら、自分なりの考えを深められるようにすることによって、子どもたちの学び合いが実現していくことが考えられます。

この幅と深さの用水路が11km続くことから、「なぜ、こんなに長い用水路を作ったのだろうか。」という疑問をもたせたい。



【小野田用水の一部】

11kmという長さには、附属小から○までなんだよ。



【用水路の幅と深さを話し合う様子】

なぜ、こんなに長い用水路を作ったのだろうか？

【授業に生かすと・・・】

地域素材教材化のポイントから、「子どもの知的好奇心を高められる」教材だったと考えられる。

子どもの姿と具体的な働きかけ

⑧…評価 ⑨…形態や場

- ⑧ 他にも、地域の開発に尽くした人について調べたいという子どもには、副教材「わたしたちの鹿児島県」を活用するとよい。私たちの住む鹿児島県他の地域では、どんなことを克服して現在も生かされているのかを調べることを通して、郷土鹿児島県に住むよさを味わうことができる。または、教師側でいくつか題材を選んでおき、それらを選択させて、お互いに調べたことを発表しあう活動も考えられます。その際も、本単元の学習問題や追究の柱を生かして調べさせるようにする。
- ⑨ (1)の自分たちの生活と先人の働きや苦心に意志決定をする姿。(4)のことをとらえる姿。(個人新聞、テスト)
- ⑩ 本単元で学んだことを振り返らせながら、個人で新聞にまとめる場

IV 研究の成果と課題

わたしたちは「人間の営みに共感し、自分の生き方を問い続ける社会科授業の創造」という主題で3年間の研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題を得ることができた。

1 研究の成果

〈本年度（3年次）研究の成果〉

- 自分の学びのよさを味わう子どもの姿を着眼点にし、その基になる感覚を三つの培い力との関連で分析することで、学習内容、指導方法を含む学習指導の考え方を明らかにすることができた。
- 指導方法に関しては、領域ごとに指導方法の要件を設定することにより、指導方法を具体化し、培いたい力をこれまで以上に高めていくことができた。
- 自己評価、相互評価を関連させた評価方法を取り入れたことで、自分のよさを味わいながら友達のよさを自分の学びに生かそうとし、自分の生き方をこれまで以上に問い続ける姿が見られた。

〈シリーズ（1～3年次）研究の成果〉

- 前研究で得た、思考・判断、技能・表現における発達特性を踏まえながら、関心・意欲、態度の面から子どもたちが自分の生き方を問い続ける姿を明らかにすることができた。
- 子どもが常に自分の学びを振り返りながら追究することができるような自己評価を検討することで、自分の学びのよさを味わいながら学習に取り組むことができた。
- 社会科における培いたい力を明確にすると共に、「人間の営みに共感し、自分の生き方を問い続ける」子どもの姿が確実に表れるための学習内容設定や指導方法の在り方を明らかにできた。

2 研究の課題

- 子どもの培いたい力の中でも特に問題解決能力をより確実に定着させるための個に応じた指導方法の改善が必要である。特に、学び取った力をどのように発揮させるかを、学年の発達段階を考慮して明らかにさせていくことが必要である。
- 新学習指導要領に向け、地域素材の見直しをはじめとする教材開発や授業への具体化が必要である。

◎ 参考文献

- 文部省「小学校学習指導要領解説 社会編」（日本文教出版株式会社出版 平成11年）
- 鹿毛雅治著 「子どもの姿に学ぶ教師『学ぶ意欲』と『教育的瞬間』
（教育出版 2007年）
- 長瀬莊一著 「関心・意欲・態度（情意的領域）の絶対評価」（明治図書 2003年）
- 古藤泰弘編 「学習力を育てる授業」（教育開発研究所2007年）
- 安野功著 「社会科授業力向上」（東洋館出版 2006年）